

第1回ASRC国際ワークショップ「極限条件下実験によるアクチノイド化合物のエキゾチック物性研究への新しいアプローチ」 1st ASRC International workshop “New approach to the exotic phases of actinides compounds under unconventional experimental conditions”

神戸 振作 重元素系固体物理研究グループ

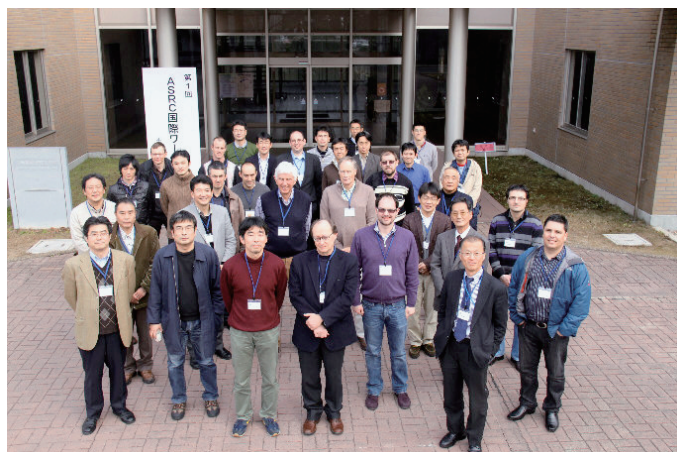
Shinsaku Kambe Research Group for Condensed Matter Physics of Heavy Element Systems

このワークショップは先端基礎研究センターの第1回国際ワークショップとして、平成23年2月16日から18日にかけて、先端基礎交流棟一階の大会議室で行われた。東日本大地震前にワークショップを開催できたことは誠に幸運であった。このワークショップは、平成22年度に採択された黎明研究課題“New approach to the exotic phases of actinides compounds under unconventional experimental conditions (極限条件下実験によるアクチノイド化合物のエキゾチック物性研究への新しいアプローチ)”に参加している各国の研究者が一堂に会し、研究成果の討論及び今後の共同研究計画を議論することが主な目的であった。ちなみにこの研究課題は23年度も継続して採択されている。議長は研究代表者であるラウエ・ランジュバン研 (ILL) のLander博士と私が務めた。参加者は国外から13名(米、英、独、仏、伊、ブラジル)、国内から25名程度、計約40名であった。ワークショップでは、まず各研究所の最近の成果が発表され、現状で解明すべき課題を抽出する討論を行った。その後、物質開発グループ、中性子+X線散乱グループ、NMRグループの3つのグループに分かれて、ラウンドテーブルの時間を十分に設けた。本ワークショップの参加者は皆f電子系

化合物研究の専門家であり、今までお互いに共同研究も行った経験も多いため、最初から突っ込んだ議論が行われた。ロスアラモス研で新しく発見された超伝導体PuCoIn₅の共同研究の今後の方向や、ラウエ・ランジュバン研やヨーロッパ放射光施設 (ESRF) での極限条件下 (高圧下や高磁場) での今後の実験計画について話し合いが行われた。また困難である超ウラン化合物の今後の物質開発についても議論が交わされた。このような共同研究計画の議論は、概してなかなかまとまらないことが多いものだが、今回の場合、テーマを絞ったため、実り多い議論になったという感想が多く参加者から聞かれた。中性子散乱セッションの座長を務めていただいた遠藤康夫東北大名誉教授には、“先端基礎研究センターのアクチノイド物性研究のレベルの高さには感心した。今後も是非頑張るように”とのお褒めの言葉をいただき一同勇気付けられた。

バンケットは、海外からの参加者の宿泊施設とした水戸のホテルで開かれた。立食形式であったはずが、そのうち周りの椅子を集めてテーブルについていつのまにか一同着席したバンケットとなり、腰を据えて談義に花を咲かすことができた。

23年度の同ワークショップはグルノーブルのラウエ・ランジュバン研において行われることが既に決定されている。ここでは、本来のワークショップ名に戻り、“REIMEI Workshop”となり、日本からもメンバー多数が参加する予定である。私もちょうどその時期グルノーブル大学に招聘教授として滞在するので、議長として現地で運営のお手伝いをする予定である。ラウエ・ランジュバン研のような海外の著名な研究所で“REIMEI”の名のついたワークショップが行われることは、原子力機構の国際化の観点から喜ばしいことと思う。ちなみに“REIMEI”の意味“Dawn in Japanese”は皆、理解していて喜んで(面白がって?)使っているようである。



先端基礎交流棟前での参加者の集合写真(最前列左から3番目が筆者)